

国際貨物量7%増の169万トン

■拠点4空港24年上期

国際拠点4空港（成田、関西、羽田、中部）を所管する各税関の資料をもとに本紙が集計した24年上半期（1～6月）の国際貨物量合計値は前年同期比7.4%増の168万6663トンだった。2月は前年割れしたが、他の月はプラスを記録。5月、6月は2ケタ増だった。紅海情勢の悪化に伴う航路迂回など世界的なサプライチェーンの混乱で航空輸送に貨物がシフトした傾向にある中で、日本の国際拠点空港の実績も底上げされたとみられる。

東京税関、大阪税関、名古屋税関の資料を基に4空港の国際貨物取扱量を単純合算した。4空港の国際貨物量の合計値は、1月が9.6%増の25万2637トン、2月が2.6%減の24万5587トン、3月が5.8%増の31万716トン、4月が5.7%増の28万3542トン、5月が13.3%増の29万1881トン、6月が12.4%増の30万2300トン。なお24年上期の国際貨物量合計値は、コロナ禍の影響に伴う物流の混乱で、世界的に航空貨物量の伸びが目立った22年上期との比較では8.3%減だった。

東京税関によると、成田空港の上期の国際貨物取扱量は0.9%増の93万6984トン。2月、3月は前年同月を下回ったが、4月にプラスに転じると、5月は11.3%増の7万3687トン、6月は11.4%増の7万8420トンと2ケタ増。成田空港の上期実績の内訳は、積み込み量が1.9%増の

42万9505トン、取り下ろし量が微増の50万7479トン。仮陸揚げ貨物の内訳は、積み込み量が11.2%増の16万5223トン、取り下ろし量が7.0%増の18万1754トンだった。成田空港で輸入された貨物（成田地域通関分）の生鮮貨物、ドライ貨物の内訳は、生鮮貨物が1.6%増の3万6006トン、ドライ貨物が2.4%減の24万208トンだった。

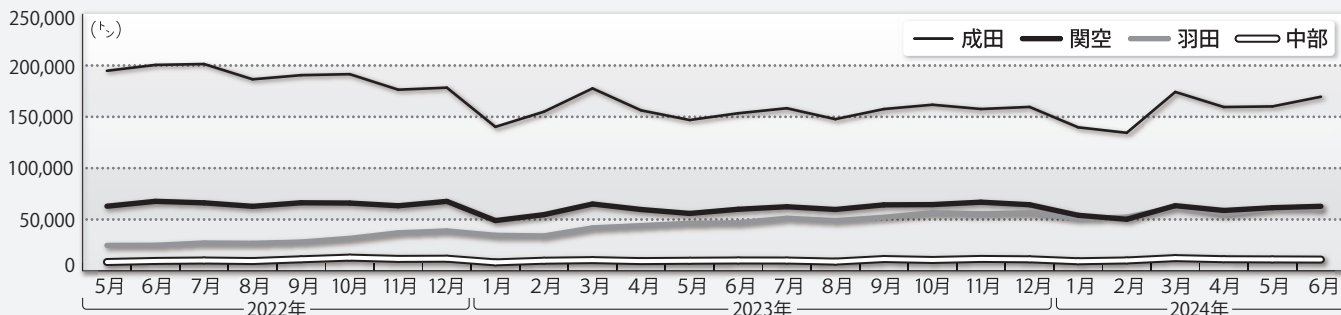
羽田空港の上期の国際貨物取扱量は38.1%増の33万8682トン。内訳は、積み込み量が34.5%増の17万4768トン、取り下ろし量が42.3%増の16万3914トン。羽田空港から輸出された貨物量を通関官署別にみると、羽田地域通関が2.4%増の7845トン、その他地域通関が39.7%増の6万8753トン。羽田空港で輸入された貨物量の内訳は、羽田地域通関が55.7%増の4万6543トン、その他地域通関が13.3%増の3万

5769トンとなった。仮陸揚げ貨物の内訳は、積み込み量が34.3%増の9万8170トン、取り下ろし量が51.8%増の8万1602トン。羽田空港で輸入された貨物（羽田地域通関分）の生鮮貨物とドライ貨物の内訳は、生鮮貨物が11.4%増の8262トン、ドライ貨物が70.3%増の3万8281トンだった。

大阪税関によると、関西空港の上期の国際貨物取扱量は1.9%増の34万8676トン。内訳は、積み込み量が2.1%増の15万8693トン（輸出量が2.5%増の11万1161トン、仮陸揚げ量が1.0%増の4万7532トン）、取り下ろし量が1.8%増の18万9983トン（輸入量が3.7%増の13万3848トン、仮陸揚げ量が2.6%減の5万6135トン）となった。

名古屋税関によると、中部空港の上期の国際貨物取扱量は13.3%増の6万2321トン。内訳は、積み込み量が4.2%増の3万1238トン（輸出量が9.7%減の2万880トン、仮陸揚げ量が51.2%増の1万358トン）、取り下ろし量が24.3%増の3万1083トン（輸入量が9.0%増の1万9866トン、仮陸揚げ量が65.3%増の1万1217トン）だった。

成田・羽田・関西・中部空港の国際貨物量推移



(税関資料を基に本紙作成)